

# 東二口文弥人形淨瑠璃 でくの舞

国 指 定  
重 要 無 形  
民 俗 文 化 財

人形と織りなす  
極めて纖細で、力溢れる舞台。



— 令和8年定期公演 —

酒呑童子	出世景清	大職冠	源氏烏帽子折
3月1日(日)	2月28日(土)	2月22日(日)	2月21日(土)

午後2時 午後7時 午後2時 午後7時

白山市東二口歴史民俗資料館  
石川県白山市東二口卯 106-1



お問い合わせ 白山市文化課 TEL.076-274-9573



東二口文弥人形  
淨瑠璃公式 HP



東二口文弥人形  
淨瑠璃インスタ



リトルモウ  
「でくの舞」繪本



白山市の  
観光情報は  
こちら



白山市公式観光サイト  
「うらら白山人」

降雪等の影響で予定が変更になる場合があります。  
最新の情報は公式 HP で随時公開しておりますのでご確認ください。



# 開演次第

①三番叟 ②口上 ③直前口上「初段～五段」  
④上演芸題「五演目の内」⑤華ほめ  
(太夫、三味、太鼓、笛、舞人、道具使)

## 演目の大要

## げんじえぼしおり

## 源氏烏帽子折

平治の乱に敗れた源義朝の妻・常盤御前との遺児・牛若兄弟は平氏に命を狙われ、比企藤九郎盛長と渋谷の金王丸に助けられる。成長した牛若は元服のため、都の商人・五郎太夫を訪ねて烏帽子を作らせる。牛若は五郎太夫の娘東雲と夫婦の契りを交わし、源九郎義経と名乗る。義経はその後も命を狙われるが、平兵衛宗清らに助けられ、奥州平泉へ下る。

## たいしょくかん

# 大職冠

大職冠・藤原鎌足の娘紅白女は、中国唐の高宗皇帝の后であった。父鎌足が氏寺の興福寺を建立したことを聞き、紅白女はお祝いの品を願い出たので、皇帝は「面向不背の玉」をはじめ三つの宝を万公将軍運宗に命じ船で届けることとした。それを聞きつけた竜宮の竜王は、修羅王に頼み宝を奪おうとする。運宗は千倉沖で激戦のすえ修羅王を討ち取るもの、今度は志度の浦で美女に化けた竜女に宝玉を奪い去られてしまう。鎌足公の嫡男・内大臣淡海公は宝玉を奪い返すため志度の浦に向かい、そこで海女と出会い一男をもうける。淡海は海女に竜宮の宝玉を取り返せば子どもを公卿にさせると約束し、海女は海に潜り宝玉を取り返すが落命する。宝玉は興福寺本尊の眉間に安置された。遺児は成人して右大臣前房公となり、志度寺にて母の供養を行う如意輪觀音の母と再会するのであった。

# 東一囗文弥人形淨瑠璃 でくの舞

国指定  
重要無形  
民俗文化財

# 酒 吞 童 子

一条天皇の頃、都九条羅生門で鬼が出没し世を騒がせた。源頼光四天王の一人・渡辺綱は鬼の片腕を切り落とし追い払うが、後日鬼に腕を取り返されてしまう。以降、鬼たちは都近辺を荒らしまわり、公家の姫たちをさらうようになる。帝より鬼退治の勅命を受けた頼光は、家来とともに山伏姿となって、丹波国大江山に住む酒呑童子ら鬼を討ち取り、姫たちを救出し都に戻り武名を上げる。

# 清景世界のゆきよ

源氏との戦に敗れ落人となった平家の景清は、尾張国熱田の大宮司のもとに身を寄せ、娘の小野の姫と夫婦となり、源頼朝を討ち取る機会を狙っていた。景清は以前、京都清水の遊女阿古屋を妻としており、二人の子ももうけていた。阿古屋の兄、伊庭十蔵は嫉妬に狂う妹を利用し頼朝へ景清を密告させる。何とか追手から逃れた景清であったが、身代わりとなった大宮司や小野の姫にかわり入牢することとなる。阿古屋は牢前で景清に詫びる。しかし、景清は許さずついに阿古屋は二人の子供を刺し殺して自害し果てる。

かどいでやしま

門出屋嶋

平家討伐のため頼朝に加わろうと、奥州を発した源義経は、源氏の遺臣・志田三郎の勧めに従い、佐藤継信・忠信兄弟を家臣に迎える。義経は頼朝の代官として一の谷を攻め破り、屋島の戦いに挑むが、継信が義経の身代わりとなり平家の大将能登守教経が放った矢を身に受け絶命する。継信を心配し屋島まで来た妻早姫の前に継信と教経の亡靈が現れ戦場の痛ましさを早姫は目の当たりにする。その後、親族により法然上人を招いて追善供養が執り行われると、継信が姿を現し、修羅の苦患をまぬがれたと叫び、仏となつて西の空へ飛んで行ったのであった。



# 東二口文弥人形淨瑠璃・でくの舞

白山市東二口集落におよそ350余年前より伝えられる「人形淨瑠璃・でくの舞」は、当時集落の有志が京より習い覚え帰村したのが始まりとされています。「三番叟、口上、初段・・・」と語る大夫に笛、三味、太鼓が続き舞人の巧みな足拍子は文弥の原形をとどめるものとして昭和52年、深瀬のでくまわしとともに「尾口のでくまわし」の名称で「国指定重要無形民俗文化財」に指定されました。単調といわれるでくの舞のなかに暗闇に映えて怒り・喜び・悶え苦しむ心が、舞う人と“でく”とが一体になってゆくそれは極めて個性的で力感にあふれ、多面的な表現をもって舞台を闊歩し、昔時の人間像が“でく”を媒体に観る者の心に伝わってきます。